

# 超音波検査の利用方法

釧路地区NOSA Iで携帯型の超音波画像診断装置（エコー）が導入されてから、5年ほどが経過しています。みなさんも、繁殖障害の治療や妊娠鑑定で往診に来た獣医が、エコーを使用している姿を見る機会が増えてきたのではないのでしょうか？

今回は、今後さらに使用頻度が増えてくると思われる「繁殖分野におけるエコー検査の利用方法」についての紹介です。

## ①早期妊娠診断

エコー検査の中でも最も実用的な利用方法です。人工授精後25日頃から妊娠診断が実施可能（30日以降に実施したほうが誤診は少ない）と



図1 25日齢の胎児

なり、妊娠していれば胎児をエコー画面上に映し出すことができます（図1）。

妊娠していない場合、直腸検査での妊娠鑑定よりも早く空胎牛を摘発でき、治療を早期に実施できることが最大のメリットとなります。

早期妊娠診断の注意点として、牛では60日頃までに約10%前後の胎児が何らかの原因（エコー検査によるものではなく）により死滅してしまうことがあります。このため早期に妊娠が確認できた場合でも、60日前後で再度妊娠鑑定を実施する必要があります。

## ②双子の診断

早期妊娠診断と同じように早い時期から実施



図2 隣り合う二つの胎児

できます。牛の双子のほとんどは二卵性であり、子宮内に二つの胎児または胎児が入っている袋が確認できます（図2）。

## ③胎児の性別別

人工授精後60日前後で、臍帯と生殖結節の位置関係により雌雄判別が可能となります（図3）。ただし技術的に難易度が高いため、診断精度は多少落ちます。

現在、診療所の保有するエコーの台数、獣医師の人員等により全ての牛にエコー検査を実施することは不可能だと思われます。そこで、空胎期間が長い牛やどうしても早く受胎させたい（妊娠鑑定したい）牛、双子をよく産む牛などのエコー検査の実施について、お近くの診療所に相談してみたいかがでしょうか？

（標茶家畜診療所診療課 木村 邦彦）

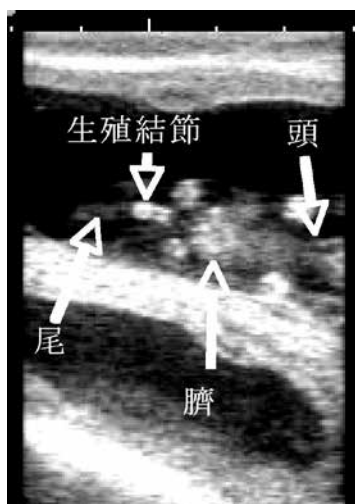


図3 雌の胎児（58日齢）